

シンポジウム報告「下田歌子と現代女子教育」

下田歌子研究所 主任研究員

伊藤 由希子

2014年7月12日(土)、下田歌子研究所開所記念シンポジウム「下田歌子と現代女子教育」が、渋谷キャンパス創立120周年記念館403教室で開催された。台風一過の暑い日であったが、200人を超える方にご来場いただいた。

来賓の文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課課長・藤江陽子氏から、下田歌子研究所、そして本シンポジウムのような女子大学間の連携の取り組みへの期待の言葉をいただいた後、基調報告を竹内整一氏(東京大学名誉教授)が、パネリストを羽入佐和子氏(お茶の水女子大学長)、福井一光氏(鎌倉女子大学学長)、湯浅茂雄氏(下田歌子研究所所長)が、また、コーディネーターを伊藤がつとめた。



竹内 整一 氏

竹内氏による基調報告の概要は以下のようなものであった。

男女共同参画という理念は、男性が優遇されていると多くの人を感じている現在の社会状況を変えていくための「文明」の理念としてはきわめて

重要なものであるが、それを具体的に実現していく際には、現にある「文化」をきちんとふまえることが必要である。それはたとえば、男女共同参画社会推進の中心的な役割を担った坂東眞理子氏の『女性の品格』『日本人の美質』の著作などには説得的にうかがうことができる。下田歌子は西洋諸国での女子教育の現地視察、つまり「文明」的刺激を受けたうえで、それをふまえながら、古くからの日本女性のあり方を研究し、特にその長所を失わないように涵養育成すべきだという「文化」的視点も重視していた。

私たちもまた、男女共同参画という生き方の問題を考える際には、「文明」と「文化」ということをきめ細かくていねいに分け、かつ重ねて考える必要があるように思う。



羽入 佐和子 氏

およそ以上のような竹内氏の基調報告を受けて、まず羽入佐和子氏が、「女子大学と男女共同参画」という題で、日本における女性の活躍状況を様々なデータで示し、特にジェンダー・ギャップ指数が際だって低いこと

をどう見るべきかという問題を提起した。また、お茶の水女子大学が教育を通してどのように女性の活躍を促進しようとしているかに関して、現在おこなっている取り組みのいくつかを紹介し、特にリーダーシップ教育では「心遣い」「知性」「しなやかさ」を理念としていることなど、社会を変える力を育てる女子大学の役割について述べた。

次に福井一光氏は「建学の精神と新しい女子大学の可能性」というテーマで、私学は創設者が掲げた建学の精神につねに立ち還りながらも、その時代時代の新しい課題に挑戦していくことが必要であると述べた。また、教育において重要なのは、個々人によって異なる、男女、資質、性格、能力といった一人ひとりの具体的な現実・事実から出発することであり、そのような観点から、女子大学の役割のひとつは、「女性の中



福井 一光 氏

にある可能性」を開花させる点にあるのではないかと論じた。

「下田歌子と実践女子学園」というテーマを掲げた湯浅茂雄氏は、下田歌子の教育者、歌人、国文・国語学者、家政学者、社会福祉事業家としての側面を紹介しながら、下田が実践女子学園以外にも多くの女子教育機関の創立に関わっていたその精神を継承し、女子教育機関が連携していく必要性、そして下田歌子研究所をその拠点のひとつにしていきたいと意気込みを述べた。



湯浅 茂雄 氏

パネルディスカッションでは、会場からの質問も交えながら、女子大学の意義、女性のリーダーシップとはどのようなものか、男らしさ／女らしさ、建学の精神に立ち戻ることの意義、という4つの論点について、あらためて討議をおこなった。

女子大学の意義については、福井氏が、女子大学ならではの授業の提供、また、学生が自身の内にある女性としての可能性に触れる時間を持つことがで

きるということをあげ、竹内氏は、女子大学の持つ独特の雰囲気自体が、均質化した社会に豊かな多様性をもたらす可能性を持つと述べた。女性のリーダーシップについては、羽入氏が日本あるいは日本女性のリーダーシップのあり方をあらためて考える必要性を述べ、竹内氏は女性のもてなし（マネジメント）の力とリーダーとなる力との関係をいねいに考える必要性を説いた。男らしさ／女らしさについては、性差別ではなく、多様なあり方を認める契機として尊重していく必要性を、竹内・羽入両氏があらためて強調し、建学の精神に立ち戻ることの意義については、湯浅・福井両氏が、学祖の思いを時代の要請に見合ったかたちで賦活させることの重要性を確認した。

時間の制約もあり、議論を十分に尽くすことはできなかったが、社会構造や制度の問題の根本にある、人間のあり方や思いといったところまで掘り下げて女性の生き方に関わる様々な問題が浮かびあがってきたことは、本シンポジウムの大きな収穫であったと言えよう。下田歌子研究所では、今後このような取り組みを、定期的におこなっていく予定である。（本シンポジウムの詳細な記録は、年度末に発行予定の下田歌子研究所年報に掲載予定です。）



下田歌子と家政学

生活科学部長

城島 栄一郎

明治32年(1899年)開設の実践女学校・女子工芸学校に端を発する実践女子大学生生活科学部は、昭和24年(1949年)の文家政学部として大学昇格、昭和40年(1965年)の文学部と家政学部(食物学科と被服学科の2学科)への分離、平成7年(1995年)の家政学部から生活科学部(食生活科学科、生活環境学科、生活文化学科の3学科)に改組・名称変更等を経て、平成26年から現代生活学科を新設して合計4学科の現体制に発展してきた。学祖下田歌子は歌人また源氏物語研究者として高名であるが、家政学の先駆者でもあったことは余り知られていない。女子教育に生涯を捧げた学祖研究とともに将来の女子教育の姿を追求するために、本年4月に学園附置「下田歌子研究所」が開設された。この機会に、約120年前に学祖が編纂した「家政学」の教科書を繙くことも意味があると考え、主要なところを要約して紹介する。

実践女学校・女子工芸学校開設に先立つこと6年の明治26年(1893年)4月38歳の時、当時華族女学校學監であった下田歌子は本邦初の本格的な家政学の教科書(上下巻)を刊行した。上巻は「家事経済」10頁、「衣服」73頁、「飲食」「本邦料理」「西洋料理」79頁からなり、本文だけで165頁である。下巻は「住居」68頁、「禮法」74頁、「粧飾」5頁、「書簡」14頁、「贈品」14頁、「看病報」16頁、「母親の衛生、及び、小児教養法」52頁、「婢僕の使役」11頁からなり、合計254頁の大作である。更に、文中と巻末には説明用の図版が多数加えられている。120年前の著作にもかかわらず、現在の家政学の範疇をほぼ網羅していることはその優れた先見性を示すものである。なお、明治32年4月に本書を刊行した後、この年の9月から2年間の欧州視察に出発していることから、欧米の学問体系を下敷きにして編纂したものではないと推測される。

家政学の教科書は大部であり、本稿では凡例と緒言部分の紹介にとどめ、本文部分の紹介は別の機会に譲る。なお、原書の部分は「」で括弧でできるだけ忠実に引用した(一部旧漢字の表示ができないものは新字体に置き換えたものがある)。また、要点と思われる部分には〰〰〰を引いた。

なお、本書は学園ホームページの下田歌子電子図書館で一部が紹介されており、国立国会図書館近代デジタルライブラリーでは全文を閲覧できる。



「家政学上巻」の表紙



「家政学下巻」の表紙

〔凡例〕

「1. 本書は余が講述せし所を、生徒の筆記せしものなるが、一渉り、校補増訂せしかども、文章の拙く、整はざるなどは、強て、さん潤(添削)せざりき。さるは、唯、平易にして、何人にも解し易からんとを、主としたればなり。」

「1. 本書に載する所は、平常、實行し得らる、限りは、大抵、實地に験せしかど、容易に試み難きものは、信憑すべき、書籍に拠り、又は、専門諸大家の説をも聴きて、掲載せり。」

上記を含めて10項目を凡例としているが、内容は「まえがき」に相当するものである。この中で、家政学の内容には当時の日本の社会では先進的な考え方が多く含まれることから種々の批判を受けることを予想し覚悟した上で、本書を刊行するに至った経緯とその必要性を切々と述べている。

〔緒言〕

「維新以来、我が國、諸般の進歩の、無比迅速なる、世界の歴史中、未だ嘗て其例を見ざる所なり。余等、かゝる大御代に生まれ出でたる幸福を、いかでか畏み喜ばざらむ。されど、諺にも、光明かなれば、影いよいよ暗しといへるが如く、急激なる進歩には、之に伴ふ弊害、はた無きにしもあらず。つらつら、現今の状勢を考ふるに、政治、法律、文藝、技術等、その外観によりて、察すれば、秩然として、完備せるが如くなれども、顧みて、個々の家室を視れば、其内政の整頓せる、其財用の富裕なるは、殆ど希なりというべし。」

「凡、諸科の學術は、口に説くことの易くして、實地に行ふ事の難きは、世人の能く知るところなるが、家政の學に於いて、特に、その然るを見る。……………、其業の、卑近にして、手を措き易く見ゆるものから、まことに、よく、其細務にまで、通達して終始實踐せんことは頗る難し。」

「この學科(家政學)は、もと、實地應用を主とすべきものにしあれば、徒らに、机上の空談のみにては、効果を見んこと、殆ど難し。」

このようにいろいろな学問に於て、とりわけ家政学では、机上の空論ではなく実践する力が重要であると強調しており、下田先生が6年後に設立する学校を「実践女学校・女子工芸学校」という名称とした意図が酌み取れる。

緒言は7頁に及び、明治の大変革期に生を受けた喜びと、女性の社会的役割の重要性を認識し、女性の地位向上を目指す高い志と使命感がひしひしと伝わってくる。

公開講座

「女子教育の過去と未来をつなぐ」を終えて

文学部 英文学科 教授

村上 まどか

10月24日、本学渋谷キャンパスにて表題の市民講座が開催されました。これは英文学科教員の志渡岡理恵、佐々木真理、村上まどかというパネリスト3名が、それぞれイギリス、アメリカ、そして英語学における女性と教育について語るシンポジウムでした。

初めにイギリスの少女文化に詳しい志渡岡が「大学はユートピア？ — イギリスの女子大生小説から教育の可能性を探る」と題して、19世紀後半に誕生した女子学生に関するイギリス事情を語り、次にアメリカ女性文学専攻の佐々木が「教育への扉を開くために — アメリカにおける女子教育の理念と軌跡」をテーマに、アメリカでの女子大設立にいたる経緯を詳述しました。最後に筆者は「言語と女性 — ことばを変えれば社会も変わる」という題で、主に“He-Man English”の変革について解説いたしました。

“He-Man English”とは何か。英語で「男性」を表わす‘man’が、「人間」全体をも示すことは、社会が男性中心に回ってきた事実をよく物語っています。そしてまた、男か女か判らない単数形の人が出てきたら、‘he’で受けるのが英文法的に正しいとされてきました。このように男性形で女性も含める「総称のman」「総称のhe」を用いる英語の語法を、“He-Man English”と呼びます。

奇しくも国際婦人年であった1975年に *Language and Woman's Place* を著した女性言語学者 Robin Lakoff は、「総称の he」は現状のままで仕方がないという消極的な見解を持っていました。代名詞はただの記号として人々が無意識に使っているのであり、積極的に変革することはできない領域ではないか、というわけです。

例を挙げれば、伝統的には

(1) Everybody has *his* habits. (なくて七癖。)

が、英文法に則った正しい文であり、

(2) Everybody has *his or her* habits.

では長くてぎこちなく、所詮男が先で女が後、

(3) Everybody has *their* habits.



にすれば、それらは解消されますが、主語は単数で代名詞は複数という数の不一致を引き起こします。この問題は確かに手ごわく、(3)は口語的には浸透しましたが、書き言葉では長い間(2)よりも(1)が好んで用いられていました。

けれども性差別をなくす機運は着実に高まり、1992年にアメリカ言語学会が、たとえ英語として不自然でも性差別的な語法は避けるべきであるという声明を出すと、その後多くの学術・教育団体が、不自然でもなく性差別もない英語の用法を考案し、ガイドラインとして教育の場で広めるようになったのです。

例えば、代名詞を使わずに済ませると、

(4) Everybody has *some* habits.

となり、これも正しい英文です。また、そもそも‘everybody’のような男女兼用の単数形が出てくると「総称の he」を誘発するので、最初から複数形の名詞を使えばよいのです。

(5) *All people* have their habits.

するとこの用法は「総称の man」を解決するのにも有効であり、

(6) *Man* is mortal. (人はみな死ぬ。)

ではなく、

(7) *Human beings* are mortal.

のように言い換えることが推奨されるようになりました。

今回の講座で下田歌子をあえて打ち出さなかったのは、英語圏の教育・文化を語るからでもあり、女子教育の普遍性を追求しようとしたからでもあります。このような例が示すように、地道な教育には、無理だと思われていたことを可能にする力があるのです。

下田歌子の思いについて

常務理事

安達 勉

下田歌子研究担当理事を拝命していますので、今春の下田歌子研究所発足から半年経っての所感を、一言申し上げます。

今から115年前の明治32年(1899年)に、下田歌子が帝国婦人協会私立実践女学校・女子工芸学校を創立したときの「建学の精神」を確認する機会が、昨年からは続いています。

一つは、昨年5月に発足した大学・短大教学グランドデザイン策定会議です。10年後の大学・短大のあるべき姿を具さに検討するなかで、そもそも下田が実践を創ったときの建学の精神とは何だったのか明確にする必要が出てきたのです。大学・短大の基盤となるものをきちんと踏まえて、グランドデザインを考えようとしています。実践女学校及び女子工芸学校の校則第1条、帝国婦人協会の設立に際し広く社会に訴えた言葉、その他、歌子の言葉から、思想や精神を浮き彫りにしようとして取り組んでいます。

二つ目は、大学ポートレートへの対応で、冒頭「大学の特色／学部等の特色」において、建学の精神を掲げることを求められています。学園のホームページとのリンクにより、建学の精神と教育理念を分かりやすく示さなければなりません。これまで示されていた建学の精神は、難解な文字と逆説的な言い回しが目立ち、主張が正しく伝わるのか疑問でした。

今年7月12日に行った研究所開所記念シンポジウムでの竹内整一先生をはじめとする諸先生方の提言や問題提起を踏まえ、明治32年に新時代の女子教育を展開するにあたり、下田がどのような思いや精神をもって取り組もうとしたのか、今後の研究の進展によって明らかにされていくでしょう。また、昭和11年10月にその83年の生涯を閉じるまで、どのような理念を持っていたのかも、下田が残した膨大な言葉をたどることにより、その答えが導き出されることでしょう。



下田の著作は、昭和7年～9年に刊行された『香雪叢書』全5巻、平成10年～13年に刊行された『下田歌子著作集 資料篇』全8巻にまとまっています。『下田歌子著作集』には、大日本女学会の機関誌「をんな」、「なでしこ」、「大和なでしこ」、愛国婦人会の機関誌「愛国婦人」、帝国婦人協会の機関誌「日本婦人」、そして実業之日本社刊「婦人世界」に下田が執筆した著作が収録されており、当時の一般社会を啓蒙するに大いに力を発揮したものです。その他、家政学の教科書、源氏物語講義やヨーロッパ婦女風俗に纏わる単行書を著作し、「婦人世界」の妹雑誌である「少女の友」や、その他の少女向けの様々な啓蒙雑誌にもたくさんの小著を寄せています。これらの短編まで網羅することは容易なことではありませんが、下田の著作の全貌を明らかにし、そこから読み取れる思想や精神を明らかにして世界に発信していくのも、下田歌子研究の一つです。

私は、今から20年前まで大学図書館に籍を置いていて、短い期間でしたが下田歌子資料と古典籍を担当したことがあります。その仕事のなかで、下田の著作の掘り起しにずいぶん力を注ぎました。神田の古書会館で古書即売会が頻繁に催されていたので、「少女の友」や「婦人世界」などの雑誌の図書館所蔵リストを片手に、端本の山のなかから、未収蔵の下田の著作を発掘するという作業を繰り返しました。幸い、幾ばくかの端本を手に入れ、新たに本学の下田歌子資料に加えることができたという思いがあります。

下田歌子研究の原点として、これらの小著のなかから、下田の女子教育にかけた思いに連なる何らかの発見があると良いと思うこのごろです。

2度目の学旅に参加して —下田歌子先生と故郷・岩村—

人間社会学部 人間社会学科3年

渡邊 早紀

2014年9月8日から10日まで、実践女子学園の学祖である下田歌子先生の故郷、岐阜県恵那市岩村へ行って参りました。学祖の故郷を訪れるのは、昨年に引き続き2度目となりました。昨年は学内行事の映像化を目指すプロジェクトの一環で学旅の撮影担当を引き受け、撮影班としての参加でした。今年は撮影などの仕事を特に引き受けたわけではなかったのですが、何となく岩村という街に惹かれるものがあり、自然と参加することになりました。昨年と旅程はほぼ同じでしたので、今年は昨年の振り返りをするという心持ちで学旅に参加しました。

撮影班として参加した昨年は、ビデオカメラを持ちながら必死に撮影していたので見逃していたようですが、今年は小さな気づきから下田歌子先生の偉

大さを知ることが多々ありました。例えば、下田歌子先生が「地元の方から愛されているということ」です。高速バスで岩村に到着すると、すぐに学祖・下田歌子先生とその夫である下田猛雄先生のお墓参りをします。昨年も想像以上に立派なお墓を見てとても驚いた記憶がありますが、今年は参拝したときに既にお墓が綺麗な状態だったことを疑問に感じました。話を聞いてみると、これは地元の方がよくお手入れをされているからだそうで、下田歌子先生が故郷・岩村で非常に大切にされているということを実感することとなりました。

また、今年は自前の一眼レフを持参したので、また違った角度から学祖の故郷を見つめることになりました。岩村の田園風景や岩村城跡、城下町などの

安政元年、岩村に生まれた下田歌子は、明治4年に上京するまで、この地で育った。昭和11年に没したのも、文京区の護国寺と岩村町乗政寺山大名墓地に分骨、埋葬されている。



墓参

学旅 (がくたび)



実践女子学園では、学生が学祖下田歌子への理解を深めることを目的に、毎年、夏期休業中に「学長と行く、学祖故郷の旅」(通称「学旅」)を開催している。

学長が引率し、学祖故郷の史跡に触れることで、学園の歴史や理念を体感する機会としている。

風景は下田歌子先生が生きた時代にもあったのかなと考えながらレンズを向けていました。特に印象的だったのは、田園風景と岩村城跡です。岩村の田園風景は日本一と称されており、展望台からの眺めは息をのむ程の美しさです。沈み行く夕日とともに、時間も忘れて眺めていました。また岩村城跡の散策では、今はなき岩村城を想像しつつ登りました。岩村城跡に着くと、恵那市を一望できる絶景と草花の生えた城の岩垣にとっても感動しました。

正直なところ、学旅に参加するまで学祖・下田歌子先生がどんな方なのか、故郷がどんなところなのかということに関してあまり考えたことがありませんでした。しかし再び学祖の故郷・岩村を訪れることに決めたのは、もうこの地に他ではない魅力を感じ

じているからに違いありません。おそらくそれは、下田歌子先生の生きた跡が様々な形で残っているからではないでしょうか。岩村城跡の途中にある下田歌子先生の顕彰碑には、岩村を出て東京に行くとき決意をしたときに詠んだ歌「綾錦着て帰らずは三国山またふたたびは越えじとぞ思ふ」が刻まれています。この愛しい故郷・岩村の地を離れてまで女子教育を変えたいと願った下田歌子先生の強い意志と固い決意が、この歌からも伝わってきます。私は現在、人間社会学部3年ですが、下田歌子先生のように目標や夢に向かって努力し続ける人になり、社会へと羽ばたきたいと心に決めた3日間でした。



岩村の田園風景



下田先生顕彰碑の前で
(最前列右から3人目が筆者)

岩村藩の城下町として栄え、今なお古い町並みをよく残す岩村は、きれいな水と豊かな土地をもつことでも知られる。なだらかな山と森林に抱かれた盆地に農家の点在する景色は、「農村景観日本一」と称されている。

下田歌子研究所
研究員

所 長 湯浅 茂雄

主任研究員 伊藤 由希子

研 究 員 愛甲 晴美 久保 貴子

鈴木 隆一 関 登美子

竹内 整一 松下 寿久

山盛 弥生 横山 幸司

(平成26年11月1日現在)

下田歌子研究所ニューズレター 第3号

平成27年2月

下田歌子研究所年報『女性と文化』創刊号

平成27年3月

- 研究所発行の各種刊行物送付をご希望の方は
メールでお知らせください。

shimoda-ins@jissen.ac.jp

今年度今後の
刊行予定